

2020年8月9日 久宝教会 聖霊降臨節第11主日礼拝

メッセージ「わたしの記念として」

水谷 憲 牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅰ 11章23-26節

本日は2020年8月9日です。皆さんご存知のように、太平洋戦争末期、長崎に新型爆弾である原子爆弾が投下された日から75年になります。この原子爆弾によって、当時の長崎市の人口の約3分の1である約7万4千人が死亡し、同じく7万4千人が負傷したわけです。

昭和のはじめに「松尾あつゆき」という長崎出身の俳人がおりまして、彼は結婚して、妻千代子さんと4人の子どもたちと共に幸せに暮らしていたのですが、戦争が始まって、彼は原爆によって妻と3人の子どもたちを失いました。その時のことを彼は自由律俳句（俳句の型にはまらない流儀による俳句）という形で残しています。8月9日、彼が家に帰り着いたのは深夜になっていました。

「月の下ひっそり倒れかさなっている下か」

次の日、彼は路傍に妻と7カ月の娘、3歳の息子を発見しました。妻はかろうじて生きていましたが、2人の子どもは死んでいました。そして彼は重傷の妻から子どもたちの最期の様子を聞きました。

「わらうことをおぼえちぶさにいまわもほほえみ」

「すべなし地に置けば子にむらがる蠅」

「臨終 木の枝を口にうまかとばいさとうきびばい」

そして12歳の長男も、ついに翌日、防空壕の中で死にました。

「炎天、子のいまわの水をさがしにゆく」

「母のそばまではうでてわろうてこときれて」

子どもたちを茶毘たびに付したあと、13日に妻が死にました。35歳でした。

「ふところにしてトマト一つはヒロちゃんへこときれる」

そして妻を焼いたその日に、戦争が終わったわけです。

「なにもかもなくした手に四枚の爆死証明」

もう少し早く戦争が終わっていれば、妻も子どもたちも失わずに済んだのに。この松尾さんと同じ別れを、長崎でも広島でも数え切れない人々がしたことでしょう。

被爆者の手記には、そんな別れにあっても悲しいとも思えず、ただ呆然としていたという記述が多くあります。今何が起きているのかわからない。涙も出ない。あるいは、原子爆弾のせいで、人間が人間でないものにされてしまった様子を恐怖を感じて逃げてしまったことへの深い後悔。「一緒にいたジュン子ちゃんの上の姉さんは目が頬ほおのところまで飛び出し、鼻はとけて形がくずれ、誰と見分けがつかないくらいだった。さっきまできれいな優しいお姉さんが、こわくて近寄れなかった」という話や、周囲が「むごい死」ばかりなので、自分のおなかを痛めて産んだ娘の死を確認しようにも、死に顔を見て確認する勇気さえくじかれたという話、また、自宅に戻って父母の遺体を発見した少年が、ミイラ状に焼けただれている母の姿に、あまりにもむごさを感じ、こわくなってその場から逃げ出してしまったその親不孝をずっと悩み後悔し続けているという話。被爆者となった人々は、その一人一人が、心がズタズタに引き裂かれた体験をして来られたわけです。生き延びたからといって簡単に喜べるものではなかった。むしろ、「あの時一緒に死んでいた方がましだった」と死者をうらやむほどに、その後つらい人生を送って来られたことを思います。そしてその体験は、決してヒロシマ、ナガサキを始めとする日本の私たちだけのものではなく、その後の朝鮮、ベトナム、イラク、東ティモールやルワンダ、チベット、シリアなど、戦争の起こったところには必ずあった出来事であり、今も続いている悲しみであることを思います。私たちが子どもの頃から聞かされてきた悲しくておぞましい出来事は、遠い国、海の向こうの国だけれども、私たちの見上げる空とつながっている同じ空の下で起こった、また今も続いている出来事であることを思います。

本日の聖書は、「コリントの信徒への手紙Ⅰ」でありまして、混乱、争い、分裂の危機に直面しているコリント教会に対してパウロがしたためたものです。今日のこの箇所は、主の晩餐ばんさんについての説明がしてあります。パウロがなぜこんなことを書いたかは、この直前の箇所を見ると分かってきます。その原因はどうやら教会員同士の仲間割れのようなのです。

20節からは、「それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。なぜなら、食事の時各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです」と書いてあります。「食事」と書いてあるように、この頃のいわゆる原始キリスト教では、愛餐あいさん

会と聖餐式は区別されていませんでした。コリント教会ではそれに加えてみんなばらばら好き勝手に食事をしていたのでしょう。それではだめなのだとパウロは言っているわけです。パウロは、多かれ少なかれ教会という共同体には仲間割れがあるものかもしれないにせよ、それでも私たちは主の晩餐というものを大事にしなければならないのだと石を投げているわけです。私たちも、自分たちが毎月守っている聖餐、パンとぶどう酒を皆で一緒にいただくことにはどのような意味があるのかとか、また、私たちが毎週礼拝後に持っている愛餐の時について、あまり意識せずに来ていたのかもしれない。

聖書を見ましょう。主イエスは引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、言われました。「これは、あなたがたのための私の体である。私の記念としてこのように行いなさい」。食事の後、杯さかずきも同じようにして言われました。「この杯は、私の血による新しい契約である。飲むたびに、私の記念としてこれを行いなさい」。福音書の中で一番先に書かれたのは「マルコによる福音書」ですが、この「コリントの信徒への手紙Ⅰ」は、「マルコ福音書」よりももっと先に書かれたものでした。ですからこの主の晩餐の時のイエスの言葉も、ある程度信憑性しんぴょうせいがあると思われませんが、ここでイエスが言われた「私の記念として」とはどういうことでしょうか。

三省堂の『大辞林』によりますと、「記念」とは「後の思い出として残しておくこと、また、その物」という意味と、もう1つ「過去の出来事への思いを新たにし、何かをすること」とあります。また、『新明解国語辞典』には、「(過ぎ去った日の) 記憶を新たにすること」とあります。つまりイエスを記念するとは、イエスが十字架において私たちの罪をその身に引き受け、神様に私たちの罪の赦しゆるをとりなして下さった出来事をもう一度私たち自身が思い出し、追体験することであり、その体験を踏まえて、イエスの生きていた頃の姿を思い起こし、そのイエスならに倣った歩みを私たち自身が踏み出していくことであるわけです。

私たちは普段、食事などで人と同じ物を同じタイミングで食べるということはありません。たくさんの人と共に同じ物を「せいの」で同時に食べるなんて、特殊な体験であるわけです。私たちは主の晩餐、すなわち聖餐式において、イエス・キリストの体であり血であるものを分け合い同時にいただくという特殊な体験を通して、私たち全ての人間の罪がイエスの死と共に同時に贖あがなわれたという神様の特殊な恵みを追体験するわけです。

神様からの特殊な恵みを追体験し、私たちの身代わりとなって死んで下さったイエスに倣い従う歩みを私たちがこれから始める、あるいは改めて始めなおすきっかけとしての聖餐式に対して、私たちが毎週礼拝後に持っている愛餐会は、その実践としての場と言えるのかもしれませんが。イエスがどんなに周りから蔑さげすまれている人であろうと構わず、共に食卓を囲まれたように、私たちも自分の隣にいる人をかけがえのない大切な存在として認め、共に歩いていくために一番最初に備えられた場。そこを始めとして、私たちは少しずつその輪を広げていけたらと思っています。「私があなたがたに伝えたことは、私自身、主から受けたものです」とパウロは言っていますが、私たちもパウロのように主から受けたものを、それは人によって様々でしょうけれども、それを私たちそれぞれにできる形で、誰かに受け渡して伝えてゆかねばならない。イエスもパウロも、きっと私たちにそれを期待しているんですね。

ただ「イエスに従う」とは言っても、私たちにはイエスをすっかり真似することは難しいですから、例えば人に会ったら笑顔で挨拶するとか、毎日必ず誰かのために一度は祈る時間を持つようにするとか、過ちは二度と繰り返さないとか、相手を傷つけたら心から謝るとか、何でも良いから小さなこと一つずつでも実践していけるようになりたいものです。たとえその歩みがほんの小さな一歩であったとしても、その一歩はイエスの言われた最も大切な掟おきて「一神を愛し、隣人を自分のように愛せよ」に帰する大事な一歩です。そして、イエスを記念したその小さな私たちそれぞれの一歩が、いつか大きなうねりとなって、例えば日本と世界とをますますよき隣人として深く結び合わせる日が来ることでしょう。広島や長崎で亡くなった方々のこと、戦争で苦しんだすべての方々のこと、そして私たちの罪を引き受けて十字架につかれたイエス・キリストのことを記念して、共に思いやりと喜びの歩みを進めていきましょう。